

審査の結果の要旨

論文提出者： 佐々木 陽子

論文題目： 老いと死をめぐる想像力
——「棄老」「ぼっくり信仰」「お供え」「墓参り」の習俗を通して——

本論文は、4つの習俗（「棄老」「ぼっくり信仰」「お供え」「墓参り」）に着目して、「老いから死」の道程に踏み入ることへの人々の受容や葛藤をあぶり出し、「この世」の生者にとっての「あの世」の死者との関係の取りむすび方について考察を試みたものである。これらの習俗に絡む今日の問題にも光をあてつつ、老いと死をめぐる、日本各地でのインタビューや現地調査などを含め、さまざまな手法に基づいて分析がなされている。一見非科学的で非合理的に映る習俗を通して、日本社会がどのように老いや死と向き合おうとしているかを逆照射しようとする試みである。

まず序章において、本論文が扱う4つの習俗の関係が、サムナーやデュルケームのような古典的研究を踏まえつつ明らかにされる。さらに「あの世」を媒介としつつ、習俗行為が個人的なものか集団的なものか、死後の世界か生者の問題かという2つの軸を用いて4つの習俗を4象限にわりあてている。これによって本論文で取り上げられる4つの習俗の位置と相互の関係が明らかにされる。

第1章では、「棄老」をテーマとし、民俗学と文学の2つのアプローチを用いて比較検討する。民俗学的アプローチでは、葬制（両墓性や風葬など）と「棄老」を混同させているとして習俗としての「棄老」を否定するのに対し、文学的アプローチでは、「棄老」が習俗であることを前提に舞台が設定され、ストーリー（ここでは『檜山節考』『蕨野行』『デンデラ』）を展開している。実在しなかったとしても、人々の心性の中に「棄老」をめぐるさまざまな意識が存在していたことに焦点が当てられる。

第2章では、「ぼっくり信仰」をテーマとする。全国各地の40ヶ所以上の関連施設の現地調査や、寺の住職や地域住民からの聞き取り調査に基づいて分析が進められる。3つの死生観（土俗的死生観・キリスト教的死生観・科学的死生観）の比較を通して、「ぼっくり信仰」を土俗的なものと捉えたうえで、西日本の「嫁いらず信仰」（義父母がぼっくり逝けば嫁は不要との意味）に焦点をあてる。介護は嫁がするものとされてきたた

め、「介護嫁」「孝行嫁」表彰がなされてきた自治体もある。しかしここでは、嫁による介護の無償労働というジェンダーの問題以上に、それを避けたいとする高齢者の葛藤が浮き彫りにされる。最後まで自立していることを願う人々による「ぼっくり信仰」という習俗は、これからも生き続けると著者は指摘している。

第3章では、「お供え」をテーマとする。不在の死者への食である「お供え」、不在の生者への食である「蔭膳」などについて、75名へのインタビューに基づき考察を加えている。調査対象者の3分の1が、「お供え」に際し、死者に声掛けをしている。80・90歳代からは、ご飯を供えて、そのお供えを下げる時蓋に水がついていると、出征した人間はまだ生きてると信じられていたことが示される。このように非科学的であろうと、死者が生きていることを信じて、「お供え」は繰り返される。死を半ば受け入れつつも、「あの世」の死者との応答可能性を信じる行為で、家庭で日常的に行われる習俗といえる。

第4章では、「お供え」同様の死者供養としての「墓参り」をテーマとする。全国各地の多様な墓地300ヶ所以上で現地調査や聞き取りを行っている。個々の家庭で行われる「お供え」が外に出て、集団化し、組織的に管理されるのが墓地で、「お供え」と異なり「墓参り」は頻度が下がって特定の日に限られることになる。「墓参り」も死者とのつながりを求める行為だが、家族の変容に伴い、墓も墓石も大きく変わっている。合葬や個人葬など祖先との結びつきを強く求めない墓が増えており、従来の墓の一部は忘れられることで、無縁墓になり、「死者の死」にたどりつく。逆にいえば「墓参り」は、死者が忘れられずに生きていることの証左でもある。

結章では再度4象限図式に立ち返り、4つの習俗相互の関係と習俗を扱ってきたことの意義が説明される。習俗は非科学的に見えるが、長い時間をかけて培われてきた死をめぐる想像力であると著者は指摘する。死への恐怖、残された生者と死者との関係の中で、それを取り持つように4つの習俗が存在している。そして習俗が、科学や医療・福祉がどんなに発達しても、それらでは代替できない形で、人々の不安や寂しさを和らげ、慰撫する機能を持つことが示される。

本論文の最も大きな学問的貢献は、まず第一に、長い時間をかけ、莫大な量のインタビューや現地調査を行い、日本社会におけるさまざまな人々の老いや死にまつわる習俗のありさまを詳細に明らかにしたことにある。実際には存在しなかったが、現代でも人の意識の中にある「棄老」を文学などからあぶり出し、他方で迷惑をかけまいとする高齢者の「ぼっくり信仰」と対置させる。さらに残された生者と死者との関係として、「お供え」と「墓参り」を捉え返す。そうした老いから死に向かう人たち、残された生者た

ちの振る舞いを、整理し記述していることは、それだけでも高い評価に値する。また要約してしまうと簡単に見えるが、「ぽっくり信仰」「お供え」「墓参り」とも、莫大な量のフィールドワークが行われており、地域差などさまざまな興味深い知見を提供している。著者の長年の研究の集大成というべき作業であり、こうした市井の人々のさまざまな思念や振る舞いが、習俗という言葉を通じて、文字として残されている点だけを取っても、エスノグラフィーとして極めて大きな価値を持つ研究である。

第二に、一方でこれは、単にそうした振る舞いを記述しただけの研究ではない。非科学的ともいえる習俗に焦点を当てることで、死をめぐる想像力を見事に描き出した点は社会科学の観点から極めて重要である。「ぽっくり寺」に参拝しても、介護を受けずにすむとは限らないし、「お供え」や「墓参り」をして死者にどんなに語りかけても、死者が生き返ってくるわけではない。教会に頼るわけでもないので、デュルケームのいう意味での宗教にも完全には合致しない。にもかかわらず、そうした行動が、変容はしつつも長い間行われていることから、こうした習俗を通じて、老いや死をめぐる、日本社会の人々が持つ思考、感覚、願望を鮮やかに切り出すことに成功している。非科学的ではあるが、不安や寂しさを慰撫する機能を持つという意味では、必ずしも「非合理的」ではない。だからこそ習俗は生き残るのだろう。さらにそれを4象限図式に落とし込み、整理することで、老いから死へと向かう時間軸の中で、個人として、もしくは集団的に、どういう位置づけになるのかを明らかにしている。4つの習俗を明確に区別しつつ、相互に関連付けることで、こうした習俗が日本社会の死生観を映し出す鏡であることを示しており、大変大きな射程を持つ貴重な研究である。

この論文にも欠点がないわけではない。習俗を消滅しないものと捉えているが、「墓参り」以外では、習俗の変化に関する言及が少ないように見える。また4つの習俗には「あの世」が存在しているとの信念があるとされるが、それが各習俗やそれぞれの振る舞いにおいて、同一の信念であるのかは疑問の余地があるかもしれない。また著者も認めているように、「棄老」は実際には存在しなかったもので、それを他の習俗と同様に扱ってよいのかという疑問を持つ評者もいるかもしれない。

しかしそうした欠点は、それを解決しようとするだけで別の大部の論文となるようなものであり、大量の現地調査やインタビューを駆使して、日本社会における死生観をあぶり出すことに成功した本稿の価値を大きく損なうものではない。よって本審査委員会は、本論文を博士(学術)の学位請求論文として合格と認める。